

メディアとしてのライフ

〈死にゆく今〉を記録する



千葉商科大学政策情報学部 専任講師

後藤 一樹
GOTO Kazuki

プロフィール

1983年、埼玉県生まれ。慶應義塾大学法学部政治学科卒業、映画美学校フィクション・コース修了、東京大学大学院学際情報学府修士課程修了後、ドキュメンタリー番組制作会社、新聞社勤務を経て、慶應義塾大学大学院社会学研究科後期博士課程修了。博士（社会学）、専門社会調査士を取得。日本学術振興会特別研究員（DC2）、慶應義塾大学非常勤講師、国立民族学博物館外来研究員を経て現職。専門は社会学（移動と地域社会）、映像制作（メディア論）、ライフストーリー研究（質的調査）。

1. メメント・モリの時代 ——死に向かう社会のなかで

「少産多死」社会を生きる

日本社会は「少産多死」の時代に移行しつつある。それは深まっていく「少子高齢化」の、よりあからさまな表現である。そうした時代には、人生の始まりよりもむしろ、人生の終わりに向き合う機会が多くなる。

「諸行無常（すべては移ろう）」や「メメント・モリ（死を想え）」などの標語が語るように、古より人類は死について考えてきた。とりわけ戦争や疫病や飢饉の時代には、死に向かっていく社会意識は相当に色濃かったであろう。しかしながら、なにかしらの非常事態が死のとば口を照らし出すことなしに、日常そのものが平和のうちにおびただしい死を実現していく時代、現在をさし障りなく生きることがそのまま社会全体の収縮をもたらす時代の到来は初めてだろう。

今日、私たちは自覚的に〈死にゆく今〉を生き、社会はそれを再帰的（自己反省的）に再生産している。

〈死にゆく今〉を永続させるメディア・テクノロジー

死にゆくはずの今を、理念的には永遠に保つテクノ

ロジーがある。それはいわば「不死の技術」であるが、それこそがメディアである。メディアは人間の記憶を外部に保存する媒体であるからだ（Stiegler, 1994）。文字や写真や録音や動画やコンピューターによって現在を記録するという行為は、やがては滅びる人間の肉体に代わって、メディアというテクノロジーがその記憶を持続的に保つことである。これは考えてみれば、途方もないことだ。神をも恐れぬ人類の自然法則への抗い、時間法則に対する越権行為とも言える。

少子高齢化社会——社会の終わりに意識的に向き合うような社会——において、神をも恐れぬ人類は何を考え、実行していくのだろうか。不死の技術としてのメディアを用いて、人類の集合的記憶をどこかにプールするのではないか。「少産多死」の繰り返しが人類の物質的な肉体を消し去ろうとも、宇宙の法則を超えたそのどこかに——。その場所がインターネット上のサイバー空間だとすれば、「メタバース（超宇宙）」を創造することの真の目的、人類の根源的な目論見が近いうちに本格的に自覚され、共有されることになるかもしれない。

このことは非常に興味深い題材ではあるが、人類史の行方を物語る仕事は、「超ホモ・サピエンスの時代へ」私たちが突入していると喝破するユヴァル・ノア・ハラリ（2011）などの歴史学者に任せることにしたい。

私はライフストーリー研究者として、映像社会学者として、〈死にゆく今〉を記録することの地域社会における意義や、人生という人類史に比べれば小さな、しかし豊潤な物語における意味について語ることにしよう。

本稿の構成

本稿では、最近出版された2冊の本のなかで筆者が執筆したケーススタディを紹介する。

次節の第2節では、「私の人生を歌える？—ライフストーリーのビジュアル化とサウンド化」（岡原正幸編

著『アート・ライフ・社会学—エンパワーするアートベース・リサーチ』所収) (後藤・坪井、2020) をもとに、地域社会における人びとのライフの共有と継承について考え、第3節では、「生きられる亡き人—時間の旅としての四国遍路」(浜日出夫編著『サバイバーの社会学—喪のある景色を読み解く』所収) (後藤、2021) をもとに、他者の人生を記憶し保つメディアとしての人間について考えてみたい。



『アート・ライフ・社会学—エンパワーするアートベース・リサーチ』
(晃洋書房、2020年)



『サバイバーの社会学—喪のある景色を読み解く』
(ミネルヴァ書房、2021年)

2. ライフの共有と継承 —ライフストーリーのビ ジュアル化とサウンド化

里山の風景と人生の景色

内房線の五井駅から小湊鉄道線に乗り換え、千葉県

市原市を南下していくと、山々に囲まれた田園地帯に一軒家が点在する風景が広がる。東京駅から電車で一時間ほどの首都圏とは思えない「里山」の風景である。小湊鉄道の乗降者がピーク時の約三割に減るなか(日刊工業新聞2017年5月17日付)、この地域を中心に2014年から開催されている「いちはらアート×ミックス」では、アートによる地域おこしが目指されてきた。

2016年4月、当時大学院生だった私は、院生仲間と小湊鉄道線を伝って市原市の南部地域を歩きまわった。当初は「いちはらアート×ミックス」への関心から訪れただけであったが、この地で私たちは、上総牛久駅前にある牛久商店街の住民と出会い、次第に交流を深めていくことになる。

市原市牛久はかつて、交通の要衝として栄えた宿場町であった。そのため、上総牛久駅周辺はわりと開けており、現在でも地域のハブ的な様相を呈している。駅の北側、圏央道につながる国道297号沿いにはチェーン店が立ち並ぶ一方、駅の南側、国道409号沿いを中心とした商店街では、古くからの商店が種々の商売を営む。

その商店街を切り盛りする牛久商店会は、地域コミュニティ紙『南いちはら応援団新聞 伝心柱』の発行やナイトバザール「うしく光とアートのフェスティバル」の催しに長年携わってきており、「いちはらアート×ミックス」立ち上げの際にも重要な役割を果たしていた。しかしながら、少子高齢化の流れを誰も止めることができず、何を企てても店の売上げの大幅な向上には結びつかないといった厳しい現状を店主たちは認識していた。また、「いちはらアート×ミックス」における作品展示は、この地域を一時的に盛り上げはするものの、住民の生活や人生のありようを持続的に表現する回路にはなりえていないようであった。そして、百店舗ほどから五十店舗ほどまでに減ったという商店会には新規参入者がいないため、メンバー同士の関係性が固定化されがちであり、そこから何か新しいものを生み出すことは容易ではない状況にあった。

商店街の人びとから様々な話を聞き、以上のような課題を理解するようになった私たちは、商店街の人びとのライフ(生活・人生)そのものが主人公になるアート作品の制作を主眼に、彼・彼女らのライフストーリーを掘り起こし、表現するプロジェクトを立ち上げた。

作品のベースになるのは、私たちが聞き取る店主たちの人生の物語である。私たちはそれを歌詞にして、この街で歌い継がれていくような歌を共につくる。私たちはそれを「きおくうた」と呼んだ。

商品の販売促進を目指すというよりも、店先を歩く人たちとの対話をうながすアート作品をつくりたい——。商店会との話し合いのなかで生まれたアイデアは、『牛久のれん』として日の目を見る。各店舗の「きおくうた」をお店の顔である仕事場の店主の写真とともに「のれん」にして、店の軒先に飾るのである。

ん」にして、店の軒先に飾るのである。

2017年4月に行った聞き取りと撮影をもとに制作された以下の六店舗の『牛久のれん』が、2018年5月3日から6日の「アートいちほら2018春」(「いちほらアート×ミックス」継続イベント)の開催期間中、連携企画として各店舗に展示された(筆者と荻野亮一が作詞した「きおくうた」全文から、デザイン担当の高橋洋介氏が一部を引用して、のれんに組み込んでいる)¹。

「木村家そば店きおくうた」全文

ずんずんと歩いた日も とほとほと歩いた日も あつたろう
長い一本道をたどり 女学校へ通った いつかあの日 あの道へ

まさか 商売をやるとは思わなかった
ある人が毎晩 提灯ぶらさげ 訪ねに来て
この店の奥で 結婚式を あげる日までは

けれど それでも 月日はまわる

気づけば そば屋を 手伝う日々
むかし店は 終車まで開けていた
毎日 寝るのは一時 起きるのは五時
よくつづいたよね 若かったからだよ

朝市で かごを背負って野菜を買う お客さんが
帰りにみんな そば食べに 店が開くのを待っていた
私のお昼は 四時か五時

年越しそば すごかったですよ むかしは
みんな とってくれるから
私のおそばは 除夜の鐘が鳴ったころ 年を越してから

そばが 三十円だった時代
かつお節を 築地に買いに行つて
そばは打ちますよ 練り鉢でいまま

小さいからだで おかもちをもって 配達もした
ずんずんと歩いた日も とほとほと歩いた日も あつたろう
自転車に乗ったあの人の 背中を見ながら歩いた いつかあの日 あの道へ

お父さんが自転車で そばを二十も三十もかついで
私はそのあと つゆを抱えて 歩いてく

けれど それでも 月日はまわる

街はずいぶん変わったけれど 変わらない場所でお出迎え
変わらない味はつづいている いつかあの日 あの道へ



「木村家そば店のれん」

1 『牛久のれん』ポトレイト写真:荻野亮一(Keio ABR)、展示風景写真:後藤一樹(2018年5月5日撮影)、きおくうた作詞:後藤一樹・荻野亮一、聞き取り:後藤一樹・荻野亮一・原地利忠(牛久商店会)、記録:堀口裕三(Keio ABR)、デザイン:高橋洋介(市原市地域おこし協力隊)、のれん作製:株式会社マンザキ(牛久商店会)、制作:市原市牛久商店会・Keio ABR。



手作りにこだわります
 それしか私たちには
 できないのだから
 農家の人の団らん
 結婚式の菓子折りに
 地元のひとから愛された味は
 いまでも変わらない

三河屋菓子・農産物加工所

「三河屋菓子舗きおくうた」全文

それまで働いていたのは デパートだった
 嫁いだ先は 和菓子屋でした

仕込みは二時から はじめます
 黒あん 白あん かしわにさくら
 練り切りこねて お花を咲かす

休みなんて なかったです
 お菓子も暮らしも そんなに甘くは ありません
 風邪をひいてた あのころよりも
 いまのほうが 元気だけれど
 この街も ほんとに人が 減っちゃって

嫁いでからは
 ご苦労ばかりですよ ふふ ふふふ
 五十年守ってきた店は 今日笑顔で営業中
 手づくりに こだわります
 それしか私たちには できないのだから

農家の人の団らんに 結婚式の菓子折りに
 地元のひとから 愛された
 味は いまでも変わらない
 亡くなった夫と ふたりでつくった 思い出の味がする

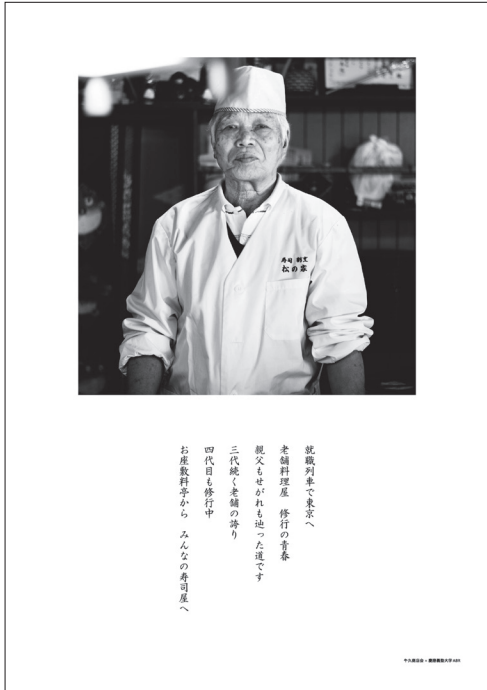
「お客さん来たよ」 呼びに来たのは 幼稚園のとき
 小さいころから店番の 娘もいまでは 立派な職人
 「それが 自然なことだったから」と 娘は笑う

下の孫が さいきんね 学校の作文で
 「お菓子屋さんになる」って 書いてくれました
 こんなに暇だから それまでもつかはわからないよ
 笑って 応えたけれど

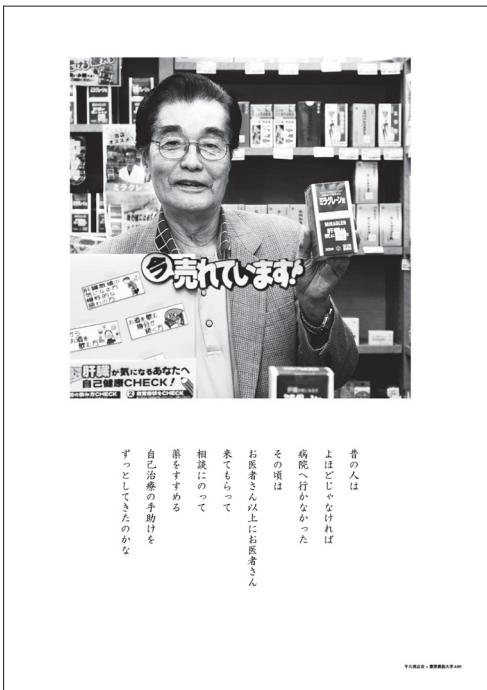
甘いだけじゃない お菓子屋さん
 居心地のいい作業場から 届けます
 思い出とあんこの詰まった 和菓子たち



「三河屋菓子舗のれん」



「松の家のれん」



「ホシノ薬局のれん」

「松の家きおくうた」全文

就職列車で 東京へ
老舗料理屋 修行の青春
親父もせがれも たどった道です

三代つづく 老舗の誇り
四代目も 修行中
お座敷料亭から みんなの寿司屋へ
味は神田 名店仕込みの お墨つき

地域を支えてもらっているから 自分も地域を支えます
何を言われても へのかっぱ たたき上げですから
PTA の会長から 観光協会会長まで 務めてきました

暮らしの場所は 自分たちの手で おこさなきゃ
未来へのバトンを この地でつなぐ
消防団と 牛久ばやしも リレー中
せがれも孫も ここに根づいて

自分のことは 自分で決めて
みんなの街は みんなで守る
目に見えない 活性化
その姿が 頼もしい

「ホシノ薬局きおくうた」全文

むかしは どぶっ田だった この町
防空壕も 水びたし
まともに使えた ことがない

五井にあった ホシノ薬局の
支店を出した 昭和の十年
町の唯一の 薬局に

急な病気で お客さんが「こんばんは」
ちびちび酒飲む親父が 応える夜ふけ
遅くまで 開けているのは
いつでも誰かを 診られるように

薬学部を出た私
親父の店を 引き継いで
最初にしたのは お店の改築

段差を すべてなくして
お客の目線で 話せる店に

対面販売を 大切に
地域の健康管理が 使命です

むかしの人は
よほどじゃなければ 病院へ行かなかった
そのころは お医者さん以上に お医者さん

来てもらって 相談にのって 薬をすすめる
自己治療の手助けを ずっとしてきたのかな

いまも この地で
町の元気を 守りたい

「小野精肉店きおくた」全文

学校が きらいだったから
手に職あればと 店を開いた
親父は油屋 おふくろが天ぷら揚げて
私は肉屋に なりました

むかしは店に ひとだけ
まとめて揚げ物 していたけれど
いまでは お客の注文あってから
いまはほんとに 少ないね

できることは 大してなかった
だから 一生懸命だった
お客に誠心誠意 対応している
それだけだった

五十年 ずっと来てくれる お客さん
毎年暮れの おおみそか
バラ肉一枚 買いに来る

来るかなと 想っていると 来てくれる
嬉しいですよ それだけで
お客さんは 顔見るだけで 嬉しいですよ

店の歴史は お客の歴史
でもね それだけじゃ 食えないですよ

街の未来は 商店会の 歳のとった若い人
次の世代に 託したい
栄えているときより 困ったときこそ
みんなで なにか やりたいね

ナイトバザールの つながりが
夜を照らしてくれたら いいのに



親父は油屋、
おふくろが天ぷら揚げて、
ぼくは肉屋に
昔は店にひとだけ、
いまはほんとに少ないね
ナイトバザールの繋がりが、
夜を照らしてくれたら
いいのに

今大塚店・豊後橋店大塚店



「小野精肉店のれん」

「こがねや菓子舗きおくた」全文

長男は つらい
兄弟が 八人いれば なおさらだ
親父は言った 「在庫のいらぬ商売がいいぞ」

だからはじめた 和菓子店
はじめるまでの 長い道のり

中学を出て 十五歳
十年間 東京で修行した
日本橋の名店でも 働いた

最初のうちは かまどの煤とり 犬の散歩
大したことは させてもらえない
見よう見まねで メモとって
あんこをもらって 部屋で練習

師匠のもとで 初めてあんこに 触れたとき
褒められたとき それはそれは うれしかったよ

実家に戻って この店だしたら
ここでは菓子折りが はやってた
東京で習わなかった 技術磨いて
冠婚葬祭の引き出もの ひたすら作ったね

祭りがあつたら 酒屋さん
式があつたら うちの出番
この街は 適材適所でまわっていたのさ

運命とともにする 同志ほしくて
商店会立ち上げた あのことろ
自分たちががんばらないと 街の未来は守れなかった

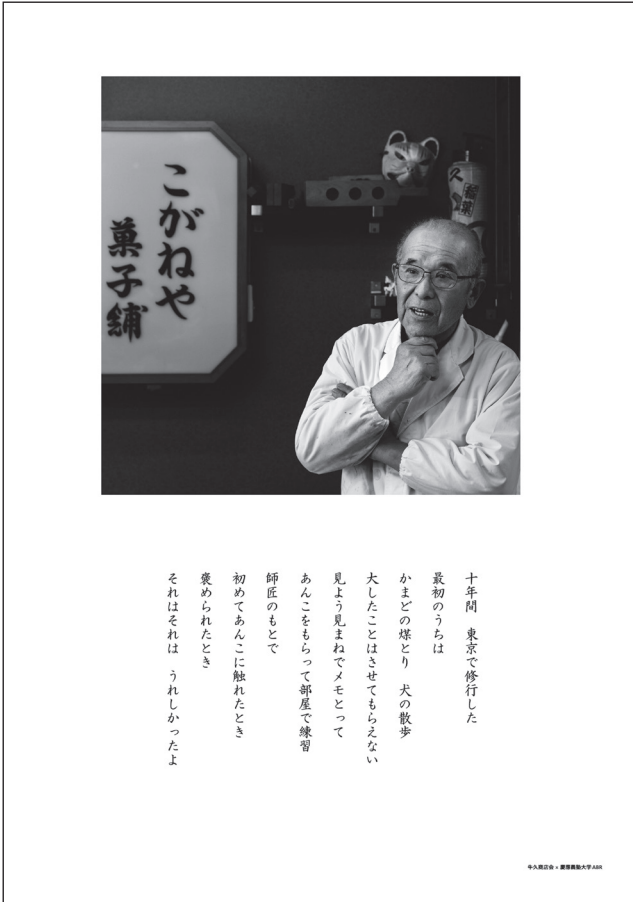
時代とともに お菓子も変わる
型抜きの菓子は いまじゃやらない
新商品の開発には 熱心です
旅先で 必ず現地の甘味をかうくらい

そうして生まれた いちご大福 コーヒー大福
皮やあんこのバランスと 色にもこだわる 逸品です
お菓子は目で食べ 舌で味わう ものだから

時代とともに 考え方も変わる
何がいいかは 俺には もうわからない
俺たちの時代は ケータイなんか なかったもの

俺の考えは もう古いね
年寄りが出しゃばるのは よくないね
見えないところで 見守っているよ

時代の流れに 寄りそいながら
俺は一生 修行中



「こがねや菓子舗のれん」

『牛久のれん』は芸術祭を超えて、その後も現在に至るまで、それぞれの店先に毎日飾られ、街を訪れる人と店の家族との交流をうながしている。予期せぬ効果として重要だったのは、『牛久のれん』が住民の相互理解と親睦を深める仲立ちともなり、街の人間関係を動かしたことだった。

『牛久のれん』プロジェクトは、ライフストーリーの「歌詞化と可視化」を試みたものであったが、それと同時に私達は、もう一つの企画を展開した。商店街の老舗旅館・大津屋に暮らす女将（おかみ）のライフストーリーをもとに、その「歌詞化と楽曲化」に取り組む『大津屋きおくうた』プロジェクトである。

どちらのプロジェクトも、街に生きる住民の「きおくうた」をベースにしたものであるが、歌詞と写真が相互に意味を引き出し合う重層的テキストが『牛久のれん』だとすれば、「きおくうた」を文字通り歌にした『大津屋きおくうた』は、メロディーや演奏、歌い方によって歌詞の意味合いが変化する生ものであった。

旅館女将の人生を歌にする

女将の名は、美佐枝（ふさえ）さんという。1935（昭和十）年、市原市牛久に生まれた美佐枝さんは、旅館大津屋の二代目女将の養子として旅館で育ち、三代目女将として牛久の街で宿を経営している。

いくつもの意味の層が織り重なる表現形態のなかで、その基層となるのが女将の人生であり、彼女の人生が立ち上がっていく際の歴史的・社会的文脈であっ

た。そうした根幹のレイヤーを、どうすれば表現として尊重できるのか。私たちは四苦八苦しなながら、女将から聞き取った彼女の人生を歌詞にした。

そして私たちは、国際的に活躍する作曲家・演出家・コントラバス奏者であり、「音楽詩劇研究所」を主宰する河崎純氏に、曲作りを依頼した。

河崎は、女将が立つ人生の布置のなかに同じように自身が立つことの困難を感じながらも、彼女の感情と共鳴する過程で、それを音楽に変換していった。河崎はそのプロセスについて、こう語っている²。

〔女将の〕感情というものと実際、共振するような感覚のなかで作っていくわけですね。実際、〔女将の〕インタビューは何千回と聞いて、口調が移るまでになってるんですね。で、その口調がまた、メロディーに生かされていくっていうのがあって。

こうして出来上がったのが、楽曲『大津屋きおくうた』である。

『大津屋きおくうた』は、以下の URL から聴くことができる。『SoundCloud(サウンドクラウド)』(<https://soundcloud.com>) で「大津屋きおくうた」と検索する方法でも、アクセスできる。

楽曲『大津屋きおくうた』³

<https://soundcloud.com/user-801527365/sets/fsax5aybrth5>



大津屋さん1

河崎純

いろいろなひとがとまっていたとんやに
しやうおんにくすりうりにへいたいにばしやがとあって
すなはむりまいそれほもうにぎやかだったそりよ
そりいうまちだったの
ひとがはたらいでいたみよりのないやめ
はなまちをてんでんとたどりついたはうしくこのやど
かそくのようにくしたのそりよこのよの
えんだから

『大津屋きおくうた』歌メロディ楽譜「第一番」

『大津屋きおくうた』第一番 歌詞

いろいろな人が 泊っていた
問屋に商人に 薬売りに兵隊に
馬車通って 砂煙が舞い
それはもう 賑やかだった
そうよ そういう街だったの

いろいろな人が 働いていた
身寄りのない娘 花街を転々と
辿り着いたは 牛久のこの宿
家族のように 暮らしたの
そうよ この世の縁だから

² 2017年6月24日、カルチュラル・タイフーン2017における上演後の質疑応答にて。

³ 『大津屋きおくうた』作曲：河崎純、作詞：坪井聡志・後藤一樹、歌：三木聖香。河崎が楽曲に合わせて歌詞に修正をほどこしている。

女将本人にこの歌を聴いてもらおうと、彼女はとても喜びながら、「すばらしい人生だと思う、曲を聴くと」と言って、自身の人生を肯定してくれた。

その一年後の2018年7月、旅館大津屋は閉館した。

次のような会話とともに、街の子どもたちが彼女の『きおくうた』を鼻歌で歌ってくれたら、私たちは嬉しい。「あ、これ、女将さんの曲だ」「こういう女将さんの歌あったよね」「こんな人が旅館で街を見守ってきたんだよ」「また会えるかな」――。

3. メディアとしての人間 ――生きられる亡き人

四国遍路と死別の物語

筆者は2014年より、八十八ヶ所寺院を巡礼する四国遍路の経験者、および、お接待を通して遍路をサポートする四国の地域住民の双方から、四国遍路にまつわる体験を聞き取ってきた。

現時点で百名程となる聞き取り協力者たちは、巡礼やお接待を通じて会話を交わした他者の言葉を、直接話法を多用して自身の語りにとり入れていた。その一例として、ある住民の語りを聞いてみよう。

1946年生まれの男性、山田さん(仮名)は、会社を退職後、徳島県の一番札所の町に帰郷し、寺に続く道の一角で飲食店を開くとともに、幼少期に母親が熱心に実践していたお接待を自身でも始めた。2012年の冬、山田さんが初めてお接待を施した相手が、東日本大震災で肉親を亡くした青年遍路であった。

そのときの体験を、山田さんは私にこう語っている(2014年6月23日、山田さんの店舗兼自宅にてインタビュー録音)。なお本稿では、筆者による加筆・注釈を〔 〕で示す。

真冬の寒いときで。ガラガラガラっと(シャッターを)開けたん。若いしが、白衣着て、まっさらな、体のこまい(小さい)若いしが。「お! 白衣、まっさらやらなあ」って言うて。そんなとき、ひとりでに出たもん、その男に、「あ、お茶入れてあげるけん。はよ、入ってき」。それで、開けたるけん。「すいません……」って、入ってきたけん。真冬やけん、ストーブ、ストーブ、ストーブじゃ。「すぐ、ぬくうなるけんのう」ちゆうて。それで、番茶やけど、お茶あげたん。

「どっから来たん?」って、こうやって。「福島です」「あ、ふ……。あ、ふ……」。それでもう、(わしは)もの言えなんだよ。「大変だったなあ。家は、いけるんで(大丈夫)?」とか、いらんこと、(わしは)しゃべりやけど、そのときは、まだ言えん。「あの、ご主人さま」って言うたんかな。「これなんですよ」。はや一発目で、わしが詰まったやろ。「ふっ」て、終わったんや。んで、「ああ、そうか……。お茶入れるけん」つって、こうやってこう。(会話は)もう終わりじゃ、もう終わりじゃ。「はい、(お茶)どうぞ」「あ、う、来るときに私、五十も上の学校の先生している人やけどね。『(四国遍路に)行ってきます』言うたらね、あれですわ、『お前、今、福島から行って、もう、気いつかうぞお』って。『お前、福島言わんと、まわれんか?』と、そこまで言われた」ちゆうて。そしたら、一発目でわしきて、「どっからきとん?」「福島」「あ、ふ……」。こうや。そで、黙ったで。

「ああ、これですわあ」って言って、「ああ……」。一発目、一発目で。そりゃあ、気になつとつたんやと。で、来た途端に「入ってこおい、お茶」って言われて。そんで、お茶入れて、「どっからきてんねん」。そで、終わり。なんの質問もできんでな、わし。向こうから言うならできるけど。「ああ、これなんですわ、これじゃあ」。なにを言いよる。いやいや、こういう事が起きたけん、気つこうてな。もの言うてくれんぞ。もの言えんのじゃわ。「大変だったなあ」。その次はなに? 「あんたんとこ、いけたんかあ(大丈夫)?」。言えんで。なんの勉強もしとらんぞ。ぶっつけ本番で、わしは、これが正直に、ぶっつけ本番が出たわけやな。学校の先生に「福島って言うただけで、もの言うてくれんぞ」って言われて。あれ、悪い意味でなしにな。気の毒でな。

ほんで、向こうで、べらべらしゃべっていく。そじゃけん、「うちの家は、おじいちゃんとお父さんとお母さんと弟が、死にました。僕だけです、生きたのは」「ゆええ!」。ほんで、「二百メートル離れたところに、おじさんがおるんじゃけど。おじさんの家族、おじさん、おばさん、私より三つ違う、もう一人おるんですけど、あ、う、よそでおったから(助かり)、あ、う、ワン、ツー、死にました」。そんで、「一キロ離れたところ、約一キロ離れたところは、またこども、おじさん、おばさん、そんで、僕のいとこの女の子、あ、う、死にました」つって。「いええ……うええ……」。親類三軒、全滅や。なにも言えんで。「そんで、あなただけ助かったん!」。こんなもん、言えんだろ。

ほだ、向こう手が、全部しゃべる。ほなけん、「あ、う、いとこ、僕、それとこっちも、あ、う、三人は全部、長男が助かったんです」「ああ、よかったね」って言えるか。言えんだろ。だまっとつた。「ああ……ああ……」。〔――小さな声で〕てんでてんでん。「そりゃあ助かりますよ、三人は。

大阪の大学、ふたり。わしは東京……、私は東京の大学でしたから。揺れました、東京も」、な。「うわああ……」って。

「ほんで、やっぱり〔四国遍路に〕行きよんか?」。そじゃけん、「大学一年です」って。阿波一国。二年〔目〕、高知、な。次、愛媛一国。次、香川一国。そんで四年。「必ず寄りや」、わし言うたん。「夏になるか、冬になるか分かりませんが、〔大学四年間で巡って〕四年後には必ず、ここに帰りしなに寄ります」「やああ、もう、ほな、気つかわんでもええけど、まあ寄ってください、寄ってください」って言って。必ず、寄ってくれるわ。

このような死別の物語が、四国遍路では行き交う人間を介して、すなわち人間をメディア（媒体）にして交差している。

ライフ——あなたの人生を記憶する命

今度は、遍路側からとらえた住民との対話に耳を傾けることにしよう。

1934年生まれの男性、青木さん（仮名）は、夫婦で四国遍路に出かけることを心待ちにしていた妻を旅立ちの直前に亡くした。1999年、妻の遺影と共に通し打ちの歩き遍路を行った青木さんは、お接待をする四国の住民のひたむきな姿に打たれる。それ以来、十数回に及ぶ通し打ちのなかで、青木さんは遍路道に捨てられた空き缶やゴミを歩いて拾い集め、代わりに花の種を撒くなどして、四国遍路の活性化に尽くしてきた。

青木さんが私に語ったのは、自筆の般若心経を持参して歩き遍路を行っていた最中に起きた、ある女性住民との出会いである（2014年9月14日、千葉県の子木さんの自宅にてインタビュー録音）。

不思議なことあったよ。

途中でね、あの、おばさん、牛乳とかなんかを配達してるおばさんがね、向こうから来たのわかったの。そしたら、そっちの小屋に入ったんだ。そしたら、走って出てきたんだ。「お遍路さん」って言って。

行ったらね。「お遍路さん、これね、あのう、〔牛乳〕一本なんだけども、途中で飲んでください」と。俺のこったから、「じゃあ、喜んで頂きます」と。「あたしはね、こういうことをやってんです」と、それ〔般若心経の写経〕を出して、一枚出してね。「これ、好き嫌いがあるんで、嫌いだったら別としてね、

お好きだったら、あのう、渡していきますが」って言ったらね。そのおばさんが、「うわあー!」っと、〔涙〕流れてね。「俺、いたい、なに悪いことしたんだろう」って、聞いたの。

そしたらね、「今日は、うちの息子の命日なんです」と。そして、四国のね、なんだっけ、「〇〇大学」って言ったかな。「そこに入って、ラグビー部に入ってやってて、三年生だった。交通事故で亡くなった」のさ。「それが今日! 今日が命日なんです!」。そしてね、喜んで、「もう一枚、頂けませんか」って言われたから、「えっ?」って言ったの。「もう一枚ですか」って言ったらね。「実は、事故で亡くなったのは、うちの息子と息子の親友、二人とも亡くなったの。だから、この一枚を、その親友のほうに、できたらね、届けたい」と。しょうがない、二枚。「こんなこともあんのかなあ」と思って、あんなの持ってたらね。

お母さん……、涙ぼろぼろこぼして。まさか、あたしんとこ見て、「息子だ」とは思わんよな。向こう、若いんだから。「お遍路さんにお接待をしたら、〔般若心経を〕やってくれたというのは、息子がね、代わりになって、こういうふうで、あたしんとこによこしたのかな」と思ったんじゃないの。四国の人だからね。

四国遍路における他者との偶然で直接的な出会いを通して、ある者の意識は日常の社会秩序による統制を失い、宙吊りになる。すると、その透明な器としての身体には、誰か別の者の声が響き渡り、別の者の意識が投影されるようになる。その際の他者には、生者だけでなく、生者を介した死者も含まれてくる。

人間の意識と身体は、亡き人の記憶を保持し、別の誰かに伝えるメディア（媒体）なのである。

私はある日、四国遍路の道で、篠崎寛子さん（仮名、1956年生まれの女性）という遍路と出会う。それから七年間に及ぶ彼女との交流のなかで、私はメディアとしての彼女を介して、彼女の亡き息子と出会い、向き合うようになる。

そして次第に気づいていくのだった。道端で咲く花にも、空を飛ぶ鳥にも、亡くなった命は息づいている。あなたが生きていたこと、そこでさまざまに紡がれた関係性は今も生きていて、私たちのまわりで起こる、あらゆる出来事の縁起として、永遠に生き続けると。

私たちは死に向かって生きる。しかしこの〈死にゆく今〉を、生きとし生けるものが記録し記憶している。ライフとは、あなたのことを記憶する命であり、誰かに記憶される命のことである。

参考文献

後藤一樹・坪井聡志 (2020) 「私の人生を歌える? ——ライフストーリーのビジュアル化とサウンド化」 (岡原正幸編著「アート・ライフ・社会学——エンパワーするアートベース・リサーチ」 晃洋書房)

後藤一樹 (2021) 「生きられる亡き人——時間の旅としての四国遍路」 (浜日出夫編著「サバイバーの社会学——喪のある景色を読み解く」 ミネルヴァ書房)
Harari, Yuval Noah (2011) Sapiens: A Brief History of Humankind. 柴田裕之訳「サピエンス全史——文明の構造と人類の幸福 (下)」 (河出書房新社、2016年)
Stiegler, Bernard (1994) *La Technique et le temps: Tome 1. La faute d'Épiméthée*. 石田英敬監修「技術と時間1——エピメテウスの過失」 (法政大学出版局、2009年)